

# 大学における婦人科相談の17年間の総括

松山まり子<sup>1)</sup>, 山本 雅子<sup>1)</sup>, 日山 亨<sup>1)</sup>  
 石原 令子<sup>1)</sup>, 塩野 里恵<sup>1)</sup>, 矢式 寿子<sup>1)</sup>  
 杉原美由紀<sup>1)</sup>, 吉原 正治<sup>1)</sup>

キーワード：婦人科相談，月経，基礎体温測定

Seventeen year summary of gynecologic consultations in a university

Mariko MATSUYAMA<sup>1)</sup>, Masako YAMAMOTO<sup>1)</sup>, Toru HIYAMA<sup>1)</sup>  
 Reiko ISHIHARA<sup>1)</sup>, Rie SHIONO<sup>1)</sup>, Hisako YASHIKI<sup>1)</sup>  
 Miyuki SUGIHARA<sup>1)</sup>, Masaharu YOSHIHARA<sup>1)</sup>

Key words: Gynecologic consultation, Menstruation, Measurement of basal body temperature

## I . はじめに

広島大学保健管理センター（以下、当センター）では、学生及び職員の身体的・精神的健康の管理に関し、専門的業務として随時の身体的・精神的健康相談を行っている。当センターでは、内部のスタッフだけでは相談が難しい領域については外部医師による相談機会を設けており、婦人科関連の相談事項に対応しやすいよう、女性婦人科医師による婦人科相談を実施している。婦人科相談の実施状況について、これまでに筆者は、第39回及び第45回中国四国大学保健管理研究集会で報告してきた<sup>1-2)</sup>。今回は、婦人科相談の開始後17年間の実施状況を解析し、今後取り組んで行く上での

改善点について検討した。

## II . 方法と背景

女性婦人科医師による婦人科相談は、本部のある東広島キャンパスでは、平成10年度から開始し、現在は月3回で年間36回の相談日を設けている。平成18年度1月からは相談予約はインターネット予約制として、予約後來談するシステムとなっている。また、広島市の霞キャンパスでは、平成22年度より開始している。このたびの検討では、利用者数は、女性婦人科医師による婦人科相談を開始した平成10年度から26年度までをみた。相談の内容については、主訴・診断分類を行っている平成13年度から平成26年度までについて、外部医療

1) 広島大学保健管理センター

1) Health Service Center, Hiroshima University

機関紹介については、記録のある平成20年度から平成26年度をみた。

また、当センター職員の研修のため婦人科相談懇話会を開催した平成14年度から開始した。

なお、本研究では個人を特定する情報は扱わず、本学倫理委員会の承認のもと(E-143)検討を行った。

### Ⅲ. 結果

#### 1) 婦人科相談の利用者数について

平成10年度から平成26年度までの婦人科相談の年度別延べ利用者件数を図1に示す。婦人科相談は年間平均80人が利用し、内訳を見ると日本人学生・職員だけでなく、留学生も相談に来ている。また、近年は、婦人科相談を利用する留学生数が増加していた。

#### 2) 婦人科相談の内容について

平成13年からは、婦人科相談内容・診断分類と婦人科相談問診票を作成した。婦人科相談の内容は、まず「月経」に関することと「性・その他」に関することに分け、「性・その他」に関するこ

とをさらに「妊娠等」、「摂食障害」、「その他」とした。

結果は、「月経」に関することが71%と多くを占めていた。続いて、「その他」25%、「妊娠等」4%、「摂食障害」0.2%であった。「月経」に関することの内訳は、第1位：稀発月経・月経不順31%、第2位：月経困難症30%、第3位：続発無月経23%の順に多く、続いて月経前緊張症7%、月経その他4%、機能性子宮出血3%、頻発月経2%であった。原発無月経はなかった。「その他」の内訳は、第1位：不正出血28%、第2位：下腹部痛14%、第3位：乳房の異常・腫瘍の疑い・その他(めまい・貧血)11%の順であった。それ以外には、外陰・膣炎、膀胱炎、体重減少、帯下、更年期障害等であった。

相談内容を日本人学生と留学生で比較すると、相談内容の多い順は第1位：稀発月経・月経不順、第2位：月経困難症、第3位：続発無月経までは同じであった。日本人学生の場合、第4位：月経前緊張症、第5位：機能性子宮出血であり、留学生は第4位：外陰・膣炎、第5位：避妊(不妊)であった。職員の場合、第1位：その他・め

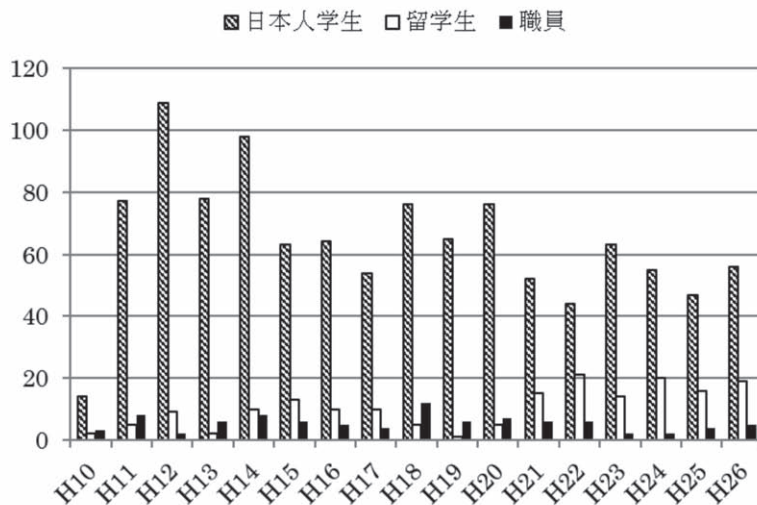


図1. 年度別延べ利用者件数

まい、第2位：稀発月経・月経不順、第3位：更年期障害、第4位：続発無月経であった。

### 3) 婦人科相談から外部医療機関紹介について

平成20年度から平成26年度までの婦人科相談を契機に外部医療機関に紹介した件数は図2の通りである。紹介の内訳は、全体の第1位：月経困難症40件、第2位：続発無月経25件、第3位：月経前緊張症13件であった。続いて稀発月経、月経不順12件、性に関するその他8件、膀胱炎8件、外陰・膣炎、かゆみ7件、その他めまい、貧血6件、乳房の異常5件、妊娠疑い4件、不正出血4件、機能性子宮出血2件、避妊（ピル）2件、性行為感染症2件、腫瘍の疑い2件、下腹部痛2件、月経その他1件、更年期障害1件、帯下1件であった。特徴として留学生では第2位に妊娠の疑いが入っている。職員ではその他（めまい・貧血）が第1位であった。

また、無月経に関しては看護師が問診の上、医療機関の受診を勧奨することもある。新入生健康診断時の看護師による問診票の確認時に、外部医療機関の受診を勧めている。

### 4) 婦人科相談懇話会について

婦人科相談懇話会は平成14年度から開始している。その内容は社会的背景も反映し、摂食障害、女性がん検診、HPV ワクチンといったテーマを取り上げた。精神科医師や臨床心理士による摂食障害の相談担当者による検討も行った。

## IV. 考 察

婦人科相談は学生や職員のニーズにあったケア・サポートとして有益なことといえる。男性にとってもパートナーのことをセカンドオピニオン的にも、気軽に相談できる機会を提供できる。特に外国籍学生や職員にとって不妊問題、妊娠した等のプライベートな問題について、学内で無料で、的確なアドバイスや外部医療機関を紹介してもらえることは大きな意味があると思う。この婦人科相談は情報提供・予防教育・問題解決能力の育成を行っているといえ、今後も継続・充実させるものと思われる。

日本人学生と留学生の相談内容の大きな違いは、留学生の場合夫婦で来日する者も多く、そのため妊娠関連の相談の場合がある。また、不妊で

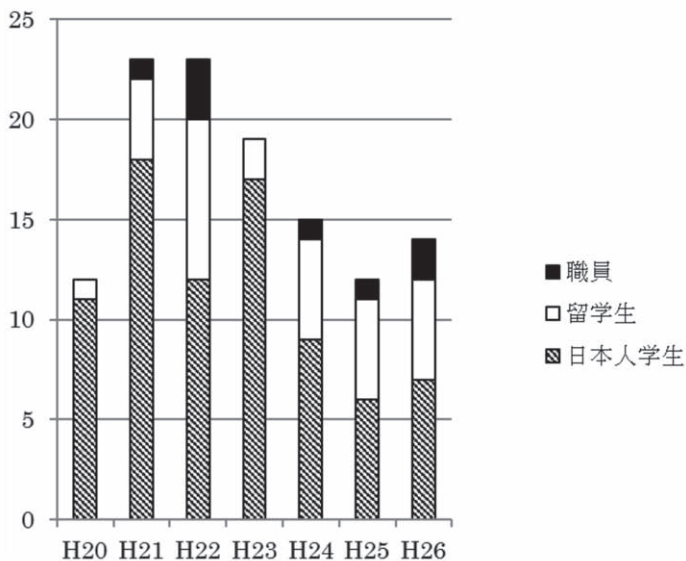


図2. 年度別外部医療機関紹介件数

外部医療機関を紹介するケースもあった。職員の場合、年齢層が高いため更年期障害が影響すると考えられる内容が多い。いずれにしても病院受診の入り口として利用している人が多いように思える。日本人学生の場合月経に関することが大きく占めている。

稲葉らは<sup>3)</sup>、「月経周期、基礎体温については中学、高校と教育を受けて来ていることから、大多数の女学生が月経周期や基礎体温及び、随伴症状に関して言葉を知っていた。また基礎体温測定は学年が上がる毎に測定している学生が増加したことから、生殖年齢が高くなると、自身の生殖健康に関心が高くなるのではないかと考察している。実際日本人学生を見ていると、入学時より無月経や月経不順の学生に対応しているが、学生自身がそのことを重要と感じ自ら医療機関を受診するという行動に移るのは、卒論も終了し卒業式を控えた2月頃となる者もいる。そのような場合、指導も治療も十分にはできない。その為大学に入学した頃よりこの婦人科相談に来るよう勧め案内することは、治療する時間も観察する時間も十分にあるので意義があると思われる。少しでも早く月経が定期的に来るように、基礎体温測定を指導しながら助言支援している。基礎体温測定をすることで自己の生殖機能の健康を認識し生活スタイルを修正するよう指導している。また、女子学生にとって月経不順や無月経となり婦人科相談を利用したことで、基礎体温測定をし、自分の月経の周期や排卵日等を知り、月経を通して自分の体の変化に気づき、自分の体に関心を持つきっかけとなりより健康的な大学生活を送る上で、重要なことの一つに月経の自己管理であると気づいてくれる意義は大きいといえる。

平成12年度から14年度の利用者数が多かったのは、この年より健康診断票に新たに婦人科の問診を加え、希望者には看護師が積極的に勧めた結果と考えられた。

健康相談はすべて予約制で行っている。平成18年度1月からはインターネットを用いた予約制となった。開始当初は健康診断時に相談に来たい人には、看護師が代行予約をしていたが、最近では

とんどの人が自分でネットにより予約を取って相談に来るスタイルになった。看護師が勧めて相談に来るのでなく自ら自主的に予約入力しているので、以前に比べキャンセルが少なくなったように感じる。都合が悪くなれば自分で予約の取り直しをしている。平成18年度以降は、急ぎの相談や当日の飛び入りは年間3～6人であり、93%以上は予約者である。相談のネット予約は定着したと考えていいと思う。留学生の増加も、ネット予約導入後増加しているように感じる。

婦人科相談は現在月3回の年間36時間で15分間隔で相談予約枠が144人分設けているが、利用率はここ5年52.7%である。婦人科相談について、更に広く周知する方策も検討が必要である。情報入手の方法として大坪ら<sup>4)</sup>は学部の掲示による入手が最も大きかったと述べている。現状では、健康相談の案内を当センターのHPと玄関前に掲示し、新学期に向けては健康診断のポスターを掲示しているが、相談案内についても学期ごとに学部に掲示することに取り組んでみたい。健康相談日程の配布は、希望した学生に限定せず、すべての学生が手に取って帰れるよう用意したい。

今後も日々の診療相談の中で、月経痛の学生にも婦人科相談を勧めることなど月経困難症の学生への対応をさらに積極的に取り組んでいきたいと考えている。そして女性産婦人科医師と連携し月経痛に関するアンケートを作り、まず本学の実態を把握し、学生に還元できるように取り組んでいきたいと考えている。また、婦人科相談を利用後、基礎体温測定を開始した学生には、今後積極的に支援して行きたいと計画をしている。

## 【謝 辞】

当センターで婦人科相談を担当いただいた3名の女性産婦人科医師に、この場を借りて、深謝いたします。

## 文 献

- 1) 松山まり子, 山本雅子, 日山亨, 他: 婦人科健康相談について, 第39回中国・四国大学保健管理研究集会報告, 116-117, 2009.

- 2) 松山まり子, 山本雅子, 日山亨, 他: 大学における婦人科相談について (東広島キャンパスに注目して), 第45回中国・四国大学保健管理研究集会報告, 61, 2015.
- 3) 稲葉育代, 山口志津子, 武藤章弘, 他: 都内薬科大学女子学生における月経関連症状とその対応への意識, CAMPUS HEALTH, 51 (1): 217-219, 2014.
- 4) 大坪敬子, 前田真由美, 後浜真紀子, 他: 婦人科相談活性化の取り組み, CAMPUS HEALTH, 45 (1), 245-247, 2008.